

飛翔76号 目次

○ 目次・巻頭言	2
○ 総科創立35周年記念同窓会大会開催！	4
○ 総科掲示板	8
○ 特集1 編集委員1年生によるオリキャンレポート	10
○ 特集2 それ行け！飛翔探険隊 ～新旧球場に行ってカープを応援しようの巻～	21
○ 研究室紹介	29
○ OB・OG紹介	40
○ 飛翔な日々	46
○ 人事異動	49
○ 編集後記	50

巻頭言

「白馬非馬」は詭弁か？

— 研究材料はどこにでもある —



吉田 光演
(総合科学研究科副研究科長)

「白馬非馬（白馬は馬にあらず）」という故事成句を知っているだろうか。中国戦国時代の思想家公孫竜が唱えた説で、「白」と「馬」は別々に知覚される概念だから、「白馬」は「馬」にあらずという主張である。しかし、広辞苑などにあるように、現代ではこの説は白を黒と言いくるめる詭弁の典型と思われる。いて評判が悪い。論理的にすべての「白い馬」は、「白い」性質と「馬である」性質の両方を

持つ（集合の交わり）。当然、

「白い馬」である個物は「馬」の集合にも含まれる。よって、

「白馬非馬」論は必然的に偽＝

矛盾である。私もそう考えていたが、ある論文でこれが詭弁で

はなく正しい命題だという説明

を読んで驚いた。しかも、それ

は理論言語学の専門書の中の論文

だったのだ (Kilka 1995, The

Generic Book, Chicago)。

クリフカ (フンボルト大学)

によれば、日本語や中国語の名

詞は個物ではなく、個物を包含

する概念としての種 (kind) を

指す。「犬は動物だ」(狗是動物)

は、英語では "Dogs are animals"

と表わせ、無冠詞複数名詞 dogs

は犬という種を意味しうる。

dogsと同じ働きとして「狗」(犬)

が用いられる。だから中国語や

日本語の名詞は冠詞が不要で複

数形もない。逆に個物として記

述する場合、「一匹の犬」のよ

うに助数詞が要る。中国語・日

本語の名詞が種を指すのが本来

の意味だとすると、「白馬非馬」

で、「白馬」は「白い馬」とい

う一つの種を指し、「馬」は「馬」という種を指すことになる。a（白馬）とb（馬）は（下位概念、上位概念として関係するが）別々の種概念だからa||bではなく、否定a≠bが正しい。故に「白馬非馬」は真となる。これは、"White wine is not wine"という英文がある解釈で真になるのと同じである（眼前の白ワインを指すのではなく、「白ワイン」一般が「ワイン」一般と同じとはいえないという意味）。

クリフカは厳密な意味論に立脚して、英語やドイツ語の冠詞言語と中国語のような無冠詞言語の名詞分析からこの結論を鮮やかに導いた。遠くヨーロッパから中国の故事を引っ張り出しているところも面白い。日本ではアリストテレス以来の西洋論理学を疑わずに一笑に付してきた白馬論であるが、西欧では実際は、「公孫竜のパラドックス」として言語哲学の一部で長く議論されてきたものであった。このエピソードは、我々が常識として疑わないありふれた現

象の中に研究材料が隠れていること、慣れ親しんだ思考様式が正しいとは限らないことを示している。上の説明が白馬非馬論を正しく把握しているかどうかはともかく、事象の一般化から仮説（中国語名詞の特質）を設定し、そこから個別例（白馬論）を結論づけるというように明らかな議論の道筋を示すことが大切なのだ。学際性・総合性を掲げる総合科学部では、多様な現象が研究対象となりうる。たとえば、学部の卒論を書くときに先行研究がほとんどない対象と取り組む、あるいは大きな社会問題に挑戦するのも確かに問題はない。実際、卒論相談時に大きなテーマを持ち出す学生も何人かいた。しかし、錯綜した現象を解明するには多くの分野の研究動向を把握する必要があるに異なり、それらに習熟する必要もある。斬新なテーマを追求するのも結構だが、身近な些細な現象から出発して、独創的・多角的な視点に到達する道もあ

るだろう。それには地道な勉強と思考力の鍛練が必要だが。

私の専門はクリフカと近い理論言語学で、日本語やドイツ語など言語の文法システムを認知的に解明することが目標である。無論こんな大きな課題は解決できないので、個別事例から攻める。現在は、クリフカからの「中国語・日本語タイプの名詞は個体でなく種を指示する」という名詞意味論・類型論に挑戦して、「そんなことはない、日本語や中国語にも（英語の普通名詞と似た）個体指示機能があり、可算・不可算の区別がある」ことを立証すべく資料を集め、あれやこれや分析している。この冬にはベルリンに出かけてクリフカ教授とこうした問題について議論して新たな証拠を示すことができた（決定打はなかなか出せないが）。アカデミックな議論では、教授、准教授、院生、学生の区別とか、大学の地位とか、そんなものはなんら問題ではない。クリフカは意味論では世界トップクラスの研究者であ

り、そのような人たちと滔々と渡り合えるのは実に楽しい。

このような出会いは稀有なことではなく、学問研究の場ではごくありふれた風景だろう。文献を漁り、データを集め、先人の言葉を吟味し、学会に行き、友人、先輩、先生と議論をする中で、新たな出会いがあり、（ときどきだが）新たな発見がある。楽しいことばかりでなく苦しい作業でもあるが、壁を越えたときの達成感は何では得られない（まさに「学問は最高の遊び」といえる至福のとき）。ただし、自分の研究課題とじっくり取り組む快感を味わえるのは、学部生ではなかなか難しく、大学院に進学してからといえる（私が大学院教育担当の副研究科長の任にあるのでこう書いているのではない）。学部生諸君も、関心を抱いたテーマや卒論の研究テーマをもっと深く掘り下げてみたいと感じたら、大学院総合科学研究科に進学して学問の醍醐味を味わってみてはいかがだろうか？